

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：34431

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580007

研究課題名(和文) 幸福の哲学を経験科学と繋ぐための基礎的研究

研究課題名(英文) Bridging the Philosophy of Well-being with Corresponding Empirical Researches

研究代表者

鈴木 真 (Suzuki, Makoto)

関西福祉科学大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：30536488

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幸福とその測定に関する哲学研究を、経験科学における研究と接続することを試みた。とりわけ、哲学、特に倫理学において重要な、誰かにとっての善としての幸福(福利)とは何かという問いを再考し、その意味の幸福が自然界ではどのような物事に存しているかを、心理学や脳神経科学などの経験科学の知見にもよりながら検討し、福利に関する一種の反応依存説(好み依存説)を擁護した。また、心的状態が経験に適応するという事態が反応依存説に問題を引き起こすという批判を論駁した。そして、各人の幸福が測定や比較が可能なものとして存在すると主張するには、誰かにとっての善に関する想定を現実を踏まえて弱める必要があると論じた。

研究成果の概要(英文)：This research aimed at bridging philosophical studies on happiness and its measurement with corresponding empirical works. Specifically, this research proposed to pragmatically revise the question, what happiness in the sense of well-being, i.e., what makes one's life better, is. Partly depending on the results of empirical sciences, such as psychology and neuroscience, this study examined what constitutes well-being, and defended a response-dependent theory, the view that takes one's well-being to consist in his ex post facto liking. And it rebutted an objection to response-dependent theories, i.e., the criticism that these theories underestimate the level of one's well-being when his relevant mental states have been adapted to dire conditions. This study further concluded that, for happiness to be real in such a way as to be comparable and measurable, we need to weaken assumptions about good for an individual, reflecting on what in the world can fulfill the roles of well-being.

研究分野：哲学

キーワード：哲学 倫理学 幸福・不幸 経験科学 測定

1. 研究開始当初の背景

(1) 哲学、特に倫理学において幸福という概念は重要であるという認識から出発した。人々に危害を加えてはいけぬ、人助けは望ましい、といった倫理的な原則は、それぞれ人々を不幸にしてはいけぬ、人々が幸福になるよう手助けするのは望ましい、といった様にパラフレーズできる。功利主義、ケアの理論、生命倫理における QOL (生の質) の理論など、倫理学理論の多くも、幸福という概念を基礎にしている。また公正な分配という規範の話をする際にも、根本的に問題なのは幸福 (福利 well-being) の分配であるという直観がある。

選択肢の倫理的評価と意思決定をするのに幸福や不幸の加減乗除、比較考量が求められる場合は多いが、幸福が基数的に測定できなければ、それは不可能になる。また幸福の増進だけでなく公正な分配という倫理規範も、幸福の基数的測定と比較の可能性を前提とする。そのため、この前提の成否は心理学や経済学のみならず倫理学にも重要である。そしてこの、幸福の基数的測定と比較が可能か、という問の答も、幸福がどんなものかに依存するので、幸福とは何かという論点の探究はさらに重大な意義をもっていた。

(2) 1990 年代以降、幸福と不幸 (以下、「幸福」と略) に関する心理学、経済学、脳科学の研究が盛んになってきていた。経済学では幸福概念は、J. Bentham の考えを受けて効用 (utility) という概念として、選択パターンや経済的行動を予測するのに使われてきた。L. Robbins の影響力のある論稿 ((1932) *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, Macmillan) 以来、効用は基数的には測定できないという見解が主流だった。しかし、心理学では主観的幸福度を測る試みが行われ、その影響を受けて経済学でも幸福を基数的に測定できるという立場が台頭した (Frey, B. S. (2008) *Happiness: A Revolution in Economics*, MIT Press)。

(3) 哲学では、古代から「幸福とは何か」について考えられてきたが、その研究は新しく出てきた幸福の経験科学とはまだ融合されていなかった。幸福とは何であり、それは原理的に測定できるものなのか、という哲学論争には、申請者も論文を書いたり、2012 年度中部哲学会シンポジウム「幸福とは何か」で提題したりして参加してきていた。しかし、幸福研究が経験諸科学でも行われ、その測定も試みられている現状では、哲学の議論だけでなく経験科学の幸福に関する知見や測定の理論も考慮に入れて議論することが重要だと思われた。当時でも、哲学と経験科学を結びつける研究は哲学の側からなされてきていたが、まだ幸福研究の全貌を捉えて幸福の哲学理論を構築する所まではいけていなかった。

2. 研究の目的

幸福とその測定に関する哲学研究を、1990 年代以降盛んになった経験諸科学における研究と接続する。特に、哲学、特に倫理学にとって重要な、誰かにとっての善としての幸福 (福利) とは何かという問を再考し、その意味の幸福が自然界ではどのようなものごとに存しているかを、心理学、経済学、脳科学などの知見と方法にもよりながら検討する。また、そうした福利としての幸福の増進や分配の公平性の問題を議論する際の基本的問題である、幸福は測定できるかという問を、哲学的議論だけでなく、経済学や心理学などの測定についての問題意識と先行研究を踏まえながら考察する。そして、こうした研究の過程で、諸分野の幸福についての概念や議論を整理した上で有用な概念的区別や枠組を提示し、幸福研究が全体として前進することに貢献する。

3. 研究の方法

平成 25 年度には、哲学と心理学、経済学、脳科学といった経験諸科学の幸福関連研究の文献を収集することにしてきた。また、経験諸科学の文献を十分理解できるように、こうした分野の基本的な概念や方法論を必要最低限研究した。また、哲学における幸福研究における概念と議論を整理した。

平成 26 年度には、経験諸科学の幸福研究を、哲学の問題関心に基づいてまとめ、整理した。そして、哲学における諸々の幸福理論を経験科学の知見に基づいて検討した。

平成 27 年度には、哲学及び経験諸科学における幸福の測定の理論と実践の考察に基づきながら、幸福は測れるのかどうか、測れるとすればどのような方法によるべきなのかについて検討した。同時に、今後の幸福研究全般に役に立つ概念的区別や枠組とはどんなものかを考察した。

4. 研究成果

(1) 「幸福とは何か」という哲学的問を問い直して、規範的探究にとっての幸福の理論を構築する」においては、幸福に関して以下のような洞察が得られた。

方法論的には、倫理学は、幸福の日常概念の分析というより、誰かの目的としての善としての幸福の専門的概念を規定するという課題に取り組んだ方がよい。その際には、日常概念には明確には無いかもしれない区別を持ち込むことが有用な場合がある。たとえば、幸福な生 (全体) とその構成要素の区別、幸福の構成要素と指標・資源の区別、幸福な生と理想的な生の区別、渴望と好みの区別などは、上記の課題を遂行する際に有用であると思われる。このような区別のいくつかは、世界をただしくとらえているかどうかという点を、科学によって検討されるべきである。

この方法論に基づいて、幸福の代表的な哲学理論の検討をした。まず客観リスト説によると、諸種のものが幸福 (の構成要素)

となる。幸福の構成要素のリストに載るものごとの一部は、心的状態ではない。それをもつことによって当事者にとっての善としての幸福(の構成要素)となるような、リストに載るものごと共通の性質などはない。この説は、何に当事者にとっての善としての幸福は存するのか、という問いに答えは無い統一的な説明はない という説なので、理論的に望ましくない。何が幸福(の構成要素)のリストに載るかについての基準がないので、なぜあるものごとが幸福であって、別のものごとはそうでないか説明不能になる。そのためか、客観的リスト説支持者の幸福リストは往々にして異なってしまう。しかも、異なる種類の幸福の比較可能性が疑問になる。しかも、客観的リスト説は、幸福とその幸福な主体の関係はどんなものかも語らない。そのため、なぜ幸福が当事者にとって善いのかも不明のままである。これと関連して、客観的リスト説では、幸福のリストは誰にとっても同じである。たとえば、知識や栄誉などを得ることが幸福のリストに載っているとすれば、たとえある人がそれを望んでいなくても、達成する可能性が無くても、必要としていなくても、それでもその人にとって善いことになる。

(自己)完成説は、幸福は自己完成した生(発達した力を発揮する生)を構成するものごとである、という。完成説によると、全般的に優良な人の生を送るなら幸せであり、全般的に悪劣な人の生を送るなら不幸であるはずである。また、幸せになるには全般的に優良な生を送らなければならないはずである。しかし「悪人栄え、善人滅ぶ」善人や優れた者が不幸な生を送り、悪人や劣悪な者が幸福な生を送ることは直観的にありそうである。さらに、完成説は客観的リスト説と同様の難点をいくつか抱える。完成説では幸福と主体の特別な関係が不在である。人間の場合、徳や卓越性の実現とその行使は、自分の個人的な性質(個人的な望みや目的や達成可能性や必要など)とは無関係に、誰にとっても善いものになる。こうした生と両立しないものごとや、悪徳や劣悪に陥ったり、それに基づいて振る舞うことは、自分の個人的な性質(個人的な望みや目的や達成可能性や必要など)とは無関係に、誰にとっても悪いものになる。

快楽説は、快だけが狭義の幸福で、苦だけが狭義の不幸で、そのバランスが総合的な意味における幸福だという説である。快楽説には、快と苦以外のものごと意識状態以外のものごと も幸福や不幸の構成要素である、という趣旨の直観に基づく批判がある。また、快と苦はもともとマークであろう。進化論的にみると、そもそも快は生存と生殖に都合のよいものごと、苦は生存と生殖に不都合なものごとのラベルとして役立つから動物にあるのだろう。すると、快楽説は、マークされる対象ではなくマー

クだけが個体にとって善だ(あるいは、悪だ)と言っていることになり、これはもっともらしくなさそうにみえる。

生満足説によると、ある時点のある人の幸福度は、その時点においてその人自身がどれくらい人生に満足しているという(正当化された)態度を持つかに依る。しかし、普通の人は、多くの時点で、人生満足度についての態度(判断ないし反応)をもっていないようにみえる。生満足説によると、そうした人は多くの時点で幸福ではありえないことになってしまいそうである。また人は、主観的・客観的状态がどんなに酷いようにみえても、人生に非常に満足しているという態度を持つことが結構ある。こうした困難が示唆しているようにみえるもっと根本的な問題は、自分の人生の満足度についての態度は、(当事者の善としての)幸福の指標ではあっても、その人の幸福を構成するものではないだろう、ということである。

欲求充足説によると、あるものごとが誰かにとって善(狭義の幸福、利益)であるのは、そのものごとがその人の欲求を充足するからである。欲求の充足とは、心理的満足感のことではなく、欲求したことが現に成立することである。この説の問題の一つは、渴望と好みはしばしば乖離するということである。そして、渴望としての欲求を充足しても、その成立した事態が事後に好まれないのなら、その人は幸福になったとは言えないのではないかと思われる。

結局、以下のような好み依存説がよいのではないかという暫定的結論に至りついた。

誰かにとっての(目的としての善としての)幸福な生を構成するものごととは、そのものごとが成立し、その者がそのことと、それが含意することを明確に認識したならば、その者がそれ自体として好むであろうものごとであり、その様なものごとに限る。

ただし本稿での議論はあくまで暫定的なものであり、好み依存説が、誰かの目的としての善としての幸福に課される制約や期待を他の理論以上に満たすことができるかどうかについては、さらなる検討が必要である。その吟味の際には、哲学のみならず諸経験科学の助けをさらに借りる必要が出てくるだろう。

(2) “Well-being and the Problem of Adaptation to Prior Experiences” においては、快楽説、生満足説、欲求依存説、そして好み依存説などの福利の反応依存説を適応という心理的現象に基づく批判から擁護した。

これらの説によると、ある存在の福利がその存在の心理状態に依存する。心理的状态は、しばしば経験に適応する。たとえば、欲求充

足説が注目する欲求という心理状態は、満たされないという経験が続けば、弱くなり最終的には消滅するかもしれない。悲惨な生活条件に置かれた人々は、食事を採ることや、健康であることや、学習することや、独立していることや、暴力から自由であることや、自分のライフコースを選ぶことや、平等な待遇などについても、欲求しなくなるかもしれない。とすれば、欲求充足説によれば、それら（を実現すること）は福利の構成要素ではなくなる。他の反応依存説についても同様なことが言える。したがって、反応依存説はそうした福利の客観的条件を過小評価し、それらが満たされていない、客観的に見て悲惨な条件に適應してしまった人々を幸福だとみなすという誤りを犯すことになる、と論じられる。

本稿では、この「適應の問題」は反応依存説に対する本物の脅威ではないと論じた。問題視されているのは、適應の事例一般ではない。たとえば、私には子供のころサッカーでうまくプレーしたいという欲求があったが、不得手だったのでだんだんそのような欲求がなくなった。これは一種の適應である。欲求充足説によれば、そのような欲求がない現在の私にとっては、サッカーでうまくプレーすることは私の幸福の構成要素ではないことになりそうだが、これが問題であると指摘する者はいない。適應という現象自体が問題なのではなく、長く「充実した」生活を送るのに不可欠な物事に関わる事例だけが問題とされるのである。ここで、反応依存説はそうした物事が成り立つこと自体が本人にとって善いことである（福利の内在的な構成要素である）ということではできないとしても、そうした物事が本人にとって手段として非常に善いものである（非常に重大な福利の道具的な構成要素である）ことは主張できる。なぜなら、長く「充実した」生活を送るのに不可欠な物事が成立しないことは、結果的に多くの欲求が充足されない事態を招く。そして、多くの苦を引き起こす、などなど、欲求充足説以外の反応依存説からしても本人にとって善くない事態を引き起こすからである。したがって、反応依存説は、適應が問題を引き起こすように見える特別な事例においては、福利の手段的構成要素に訴えることによって、「幸せな奴隷」とか「満足した貧者」といった状態にいる人々が幸福ではないという意味を説明できる。

この説明の方向性に対しては、二つの批判がある。一つは、私たちの帰結の知識は不確かであり、したがって一定の物事が福利の手段的構成要素であるという主張も疑わしいというものである。しかし、この帰結に関する一般的な不可知論は支持しがたい。たとえば食事をとらなければ、人生が短縮され「充実した」人生を送れないことは経験から明らかである。

第二のもっと重要な批判は、もしある状態

に対する反応が適應するのであれば、その帰結に対する反応も適應するであろう、という想定に基づく。この想定が正しければ、その帰結の本人にとっての悪さも過小評価することになるだろう。したがって反応依存説では、物事それ自体の価値ではなくその手段的な価値に訴えたとしても、「幸せな奴隷」とか「満足した貧者」といった状態にいる人々が幸福ではないということを示すことができない。

この重要な批判に対しては三つの反論が挙げられる。第一に、「適應の問題」において焦点となっている物事が欠ければ、結果として寿命が短くなる傾向がある。たとえば、不健康、貧困、一定の不平等、基本的教育の欠如などは期待寿命を短くする。寿命が短くなれば、長かった場合に得られた欲求充足が得られないから、欲求充足説では人生総体としてより不幸だということになる。他の反応依存説でも同様である。第二に、こうした物事は多くの心的状態に影響を与える傾向がある。たとえば、糖尿病のような慢性疾患にかかっていけば、様々な負の心的状態をもつことになり、様々な欲求充足が阻まれることになる。たしかに各心理状態はそれぞれある程度適應を受けるかもしれないが、それでも多くの心的状態がこのように影響を受ければ、反応依存説においては幸福な生への深刻な脅威とみなされる。第三に、実のところ、われわれの反応は一律に適應するわけではない。ポジティブ心理学の知見によると、たとえば、離婚や失業や深刻な障害を被ったりすると、生に対する満足度は大きく低下してそれ以前の水準にまでなかなか復帰しない。また生に対する満足（度）は、騒音や通勤時間やコントロールの欠如や人間関係の緊張などには適應しがたいようだ。そこで、たとえば食事を採ることや、健康であることや、学習することや、独立していることや、暴力から自由であることや、自分のライフコースを選ぶことや、平等な待遇などについて私たちの心的状態が適應したとしても（これも本当にそうなるかどうか疑問の余地があるが）、その帰結に関してはそれほど一律に適應するわけではないだろう。したがって、反応依存説は、物事それ自体の価値ではなくその手段的な価値に訴えて、「幸せな奴隷」とか「満足した貧者」といった状態にいる人々が幸福ではないことを示すことができる。

(3)「自然主義的功利主義と幸福の測定」では、幸福（と不幸）は功利主義 最も典型的な功利主義の形態である総量最大化功利主義は、全関係者の利益の総量を最大化する行為をなすべきだとする において期待される役割を果たせるのだろうか、という問いを検討した。功利主義は様々な批判にさらされながらも、一つの代表的な倫理学理論として重要視されてきた。その理由の一つは、幸福（と不幸）というほとんどの人が重要だと

思い、しかも自然界に存在すると思われるものに根拠を置き、その割合単純で直観的な関数として正・不正を定めていることにありといえる。しかし、そもそも幸福(と不幸)はこうした功利主義において期待される役割を果たせるのだろうか。本稿はこの問いを追究し、以下のような洞察を得た。

功利主義の目的として、誰かにとって善く、道徳的観点からみて重要であるという評価を支えられるような、それでいて一定の量的な仕方での測定可能な意味での福利の定義(理論)を構築することを考えた場合、これは少なくとも今のところ理想であって現実ではない。たとえば、総量功利主義が要求するように、福利を比率尺度で個人間比較できるスカラー量としてあらわすのはかなり難しい。ただそれは、個人間比較が原理的に不可能だとか、福利とはそもそも量的なものではないからということが明らかだから、ではないだろう。伝統的な表現測定理論の枠組みで、選択という観察可能なデータから福利の尺度を構成しようとするれば個人間比較は意味をなさず尺度を構成できないかもしれないが、それはその測定のアプローチの問題のように思われる。福利を主観的なものとみなすなら、福利を潜在変数としてみて、サイコメトリクスのアプローチを採用すべきだろう。サイコメトリクスによって幸福を検討する際にもさまざまな問題があるが、これらは心理学や行動経済学(や脳神経科学)などの助けを借りて、これらの点はある程度克服できるかもしれない。たとえば、「福利」によって指示される対象候補としては、快苦、欲求の充足、自分が好むものを得ることなどがどんなものなのかということがいまだあまりよくわかっておらず、また個人の福利を測定するのにも難点があるといった点については、諸科学の進展とともに解消されていく実際的な問題と考えるとよいところがある。個人的自由や健康といったものを心から独立した幸福の構成要素と考える場合にも、社会科学や医学などとの協力により適切な操作化に基づく測定が可能になるかもしれない。

しかし「福利」やそれを定義する語や概念に不確定なところがあるという難点はより深刻である。「福利」を特定していこうとする際には、一定の恣意性が残るのは避けがたく、功利主義者の福利の理論が議論の余地のないものに仕上がることはありそうにない。この恣意性は「誰かにとっての善としての幸福」という規範的な用途からする制約を入れても、完全になくなることはありそうにない。

また、この制約と功利主義者が「善」とその測定可能性に要請するものを合わせると、これを完全に満たすものが世界にあると考えることがかなり厳しいものとなるだろう。この際に、幸福は世界のうちにあるものではなく、非自然的なものだと考えたくならないが、その場合功利主義者は自然主義

をあきらめて、この世界における人々に対する現実の影響によってなすべきことを決めるという理念を捨てることになる。本稿で私が勧めたのは、功利主義者の「善」とその測定可能性に対する要請はそれ程自明なものではないので、それを現実に合わせて弱めることを考えるということだった。つまり、測定に関して普通より弱い想定のもとで功利主義的理論を展開するという道も残されており、そちらの方向にも目を向ける必要があるということである。たとえば、比率尺度を要求する総量功利主義ではなく、それより弱い尺度で済む平均功利主義を選んだり、ポジティブ・ネガティブ・ニュートラルの区分を前提しない福利の理論を選んだりする理由があると言えるかもしれない。さらに、不完全な間隔尺度と不完全な個人間比較可能性の下で福利の弱い意味での加法性を保持する方策を検討しているという方途もある。このような方向性を考慮に入れながら、世界にある物事が功利主義者の「善」に対する期待をどれほど満たせるのかを踏まえて、幸福とそれに基づく規範の理論を構築していくのが、自然主義功利主義に魅かれた理論家の現実的な姿勢であろうと思われる。

なお、このように改変された規範理論は典型的な功利主義よりも複雑になるはずなので、意思決定に使うのは難しくなってしまうだろう。だから、典型的な功利主義の測定に関する前提が満たされないものだとしても、私たちが日々直面する状況においてその前提が大体満たされるのであれば、典型的な功利主義は一種の理想化として役に立つかもしれない。たとえば、幸福は厳密には間隔尺度で測れるための条件を満たさないかもしれないが、平均功利主義はその単純さのためにより正確な規範理論よりも意思決定において行為を導くのに役に立つかもしれない。

我々の有限な能力や時間、そして複雑な規範理論を学んで適用するのにかかるコストを前提すれば、より正確な規範理論の見地からもその使用が正当化されるかもしれない。規範理論の構成は、(幸福の規定の恣意性を一定程度認めつつ)より正確な理論を目指す方向と、現場で役に立つ理想化を追求する方向の二つがあってよく、典型的な功利主義は前者の方向では生き延びなくても後者においては適正かもしれないのである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

鈴木真、「自然主義的功利主義と幸福の測定」、社会と倫理、査読無(招待論文)第30号、pp. 145-167、2015

Makoto Suzuki, "Well-being and the Problem of Adaptation to Prior Experiences", Proceedings of the International Symposium on Memory and

Human Well Being: Interdisciplinary Perspectives Held on 9 and 10 November 2014 at the Department of Humanities and Social Sciences, Indian Institute of Technology Bombay, India in Collaboration with Nagoya University, Japan, 査読無, pp. 1-15, 2015

鈴木真、「「幸福とは何か」という哲学的問を問い直して、規範的探究にとっての幸福の理論を構築する」、中部哲学会年報、査読無(招待論文)第45号、pp. 13-34、2014

鈴木真、「非認知主義の本性と意義」、実践哲学研究、査読無(招待論文)第36号、pp. 31-69、2013

鈴木真、「哲学・倫理学における道德判断研究の現状 道德判断の本性と情理」、社会と倫理、査読有、第28号、pp. 119-148、2013

[学会発表](計7件)

鈴木真、「エアの問題、非認知主義、不確定性」、関西倫理学会2015年度大会、2015年10月31日、同志社大学今出川キャンパス

鈴木真、「濃い概念(thick concepts)と薄い概念(thin concepts)の区別とその意義について」、日本イギリス哲学会関西支部会第53回例会、2015年12月19日、キャンパスプラザ京都

Makoto SUZUKI, "Consequentialism, Well-Being, and Other-Regarding or Evil Mental States," The 13th Conference of the International Society for Utilitarian Studies Happiness and Human Well-being Reconsidered Concept, History and Measurement, 2014年8月20日~2014年8月22日、横浜国立大学

鈴木真、「倫理学と経済学における帰結主義的伝統と価値の測定」、道德・社会認知研究会第三回、2015年2月14日、東京大学駒場キャンパス

鈴木真、「A Naturalistic Account of Current Moral Language: Partial Reference and Partial Truth」、日本哲学会、2013年5月12日、お茶の水大学

Makoto SUZUKI, "How Have Japanese Philosophers Responded to the Problems of Risk Arising from the Fukushima Nuclear Accident? (Can We Learn from Them?)" , Applied Ethics: The Eighth International Conference in Sapporo, 2013年11月2日、Center for Applied Ethics and Philosophy at Hokkaido University

[図書](計1件)

Filosofia Japoneză Azi. Yasuo Deguichi ら14名(Makoto SUZUKI、7番目), editura universității din bucurești, Romania, 322p, 2013. (担当項目) "Problema demarcației dintre știință și pseudo-știință. Aspectre sociale controversate cu privire la ceea ce pare să fie pseudo-știință în medicină." (科学と疑似科学の線引き問題と、医学において疑似科学に見えるものに関する社会問題). 査読有.(担当頁) pp. 127-161. 2013

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 真 (SUZUKI Makoto)

関西福祉科学大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号: 30536488